卒業論文

終活を巡る意思共有の課題と可能性

2019 年度入学
九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース
社会学・地域福祉社会学専門分野
1LT19100G　工藤真夕
2023 年 1 月　提出

要約

近年、急速な高齢化の進展に伴う独居世帯の増加や高齢者の孤立が問題視されている。このような状況の中で、高齢者が自身の老いや死と向き合い、死に備える「終活」への関心が高まっており、行政や民間においても様々な取り組みが進められている。

2009 年に登場した終活という言葉は、当初は葬儀や墓に関するものとして用いられたが、時代とともに定義が拡大し、近年では自身の人生をとらえ直し、今後の人生を考えるという肯定的な側面が強調されるようになった。こういった終活においては、他者の存在が不可欠なものである。当事者は、他者との関係性の中で終活を意識するきっかけや動機、さらにイメージを深め備えを具体化するということが先行研究で明らかにされてきた。しかし同時に、終活について他者と意思共有することに困難を抱えていることも指摘されている。

本論文では、貸衣装店を営む終活当事者とその家族のインタビュー調査と、終活や死をテーマにした「おくりびと」、「その日の前に」という 2 つの作品分析を行った。2 つの映像作品における見送りの事例を 4 つに分類し、インタビュー調査の対象者 3 名について、この分類に沿っての分析を行った。また、木村・安藤の先行研究による『「死の準備行動」の具体的項目の分類』を用いて、終活における具体的項目を事務的項目と感情的項目に分け、それぞれの当事者や見送る側が重視する項目についての考察を行った。

これにより、終活当事者と見送る側で重要視する項目が異なっていることが明らかになった。また、死を差し迫ったものと捉えていない健康な当事者の終活と、死を近く訪れるものであると危機感を抱いている当事者の終活に対する意識について、当事者、見送る側双方の意識にも差異が見られた。

本論文の目的の 1 つであった、終活を巡る意思共有の課題については、調査の中で明らかとなった項目を 3 つに分類し考察を行った。高齢者の孤立が進む現代において、家族や周囲の人との関係が希薄化した終活当事者が終活についての意思共有を行う相手をどのように確保していくかが 1 つ目の障壁である。そして、家族や周囲の人とのつながりがあったとしても、その相手と終活について語ることができるかということが 2 つ目の障壁である。さらに、これら 2 つの障壁を超えて終活について家族や周囲の人と語ることができても、本当に伝えたいことではなく表面的なものになってしまう可能性があるという 3 つ目の障壁が存在する。

また、もう 1 つの目的であった、終活を巡る意思共有を通じて終活当事者のみならず見送る側にとってもより良い終活を行うことができる可能性については、2 点にまとめた。本論文では、終活への意欲やイメージが持ちにくいとされる健康な終活当事者が終活を意識し、取り組むきっかけとして他者の存在が非常に重要であることが明らかになった。終活は病気などの万が一の事態が起こった時や、なかなか行動に移さないまま年を重ね、当事者意識を芽生えさせた時には既に充分に取り組むことができない場合も多い。また、死に直面した

状態の当事者と終活について語ることは、当事者が元気なうちに終活について語ることよりも抵抗感を抱くケースが多く、非常に困難であるため、終活を巡り他者と意思を共有することで健康な当事者に終活への第 1 歩のきっかけを与えることの意義は非常に大きいものであるといえる。また、インタビュー調査の事例から、個人の所有物が社会に還元される、つまり個人のための終活が社会のための終活になる可能性について提起しており、その実現には当事者とその周囲の人々、そして外部の人間との意思共有が必要不可欠である。

目次

1　はじめに 1
1.1　問題意識 1
1.2　本論文の構成 1
2　終活を取り巻く現状 3
2.1　高齢化、長寿化の進行 3
2.2　世帯の変化 4
2.3　高齢者の孤立 5
2.4　行政による終活への取り組み 6
2.5　民間での終活への取り組み 8
3　先行研究 9
3.1　「終活」の登場 9
3.2　「終活」の定義の広がり 10
3.3　終活における他者の存在 13
4　インタビュー調査 16
4.1　中村博美さんの語り 16
4.2　中村隆さんの語り 25
4.3　中村香澄さんの語り 28
5　作品分析 34
5.1　『おくりびと』 34
5.2　『その日の前に』 35
5.3　作品分析まとめ 36
6　考察 38
6.1　インタビュー調査・作品分析における事例の分類 38
6.2　終活において重要視する項目 41
6.3　終活を巡る意思共有の課題 43
6.4　終活を巡る意思共有の可能性 44
6.5　本研究の限界と今後の課題 45